

短期国際研修の目的と意義そして成果

—相互交流の実現を通じて—

沖 裕子¹

1. 相互交流の実現

2005年8月5日(金)から11日(木)にかけて、信州大学人文学部主催で実施された「日韓言語文化研修プログラム2005」の、目的と意義そして成果について、簡略にまとめておきたい。

本研修は、これまで総計5回の大学間短期研修を実際にすすめてきた信州大学人文学部日本語教育学分野の活動が母体になっている。その実施教員としての立場から、本活動を位置づけてみたい。

2000年3月の初回の交流を初めとして、2001年10月の大学間国際学術交流締結をはさみ、つごう4回にわたり韓国カトリック大学言語文化学部において韓国言語文化研修を実施してきた。その間、カトリック大学から信州大学を訪問することの実現可能性について打診を受けたものの、宿舎等の事情から心苦しいお返事を重ねてきたのであった。国際交流において重要な対等互恵の精神からすれば、明らかな不均衡に心を痛めていたところ、このたび各方面のお心が集まって初めて信州大学における研修が実施され、文字通りの相互交流の始まりとなったことは、感無量である。

幸い、大島征二前人文学部長、渡辺秀夫現人文学部長のご配慮のもと、今回の活動は人文学部主催の公式行事としての位置づけを受け、様々なご援助を賜り、人文学部国際交流委員長が実行委員会総委員長となって「日韓言語文化研修プログラム2005」という名を与えられ、全学学生を参加対象とした充実した国際交流を展開する1週間となったのであった。これを、研修母体となった信州大学日本語教育学分野の連続した交流実績の側から位置づければ、日本において行う「第五回韓国言語文化研修」であり、カトリック大学言語文化学部にとっては「第

¹ 信州大学人文学部教授(文化コミュニケーション学科日本語文化講座日本語教育学分野)。専門は、日本語学・日本語教育学。

一回日本語文化研修」であることになる。

2. 研修の概要および実行委員会組織

「日韓言語文化研修プログラム2005」は、信州大学人文学部国際交流委員会の議を経て学部主催として行われ、沢木国際交流委員長と沖委員が担当者となって、内外の協力を求める実施体制をとった。本行事は、次の3種の目的を有した複合的活動として位置付けることができる。

- 1) 大学間国際学術交流協定締結大学との間で、全学的広がりを目指しつつ交流実質化を推進する活動
- 2) 学部教育・研究の国際化をめざす活動
- 3) 地域連携と国際活動を協働させる活動

実施した研修内容の日程と行事全内容および参加者等の詳細については、本誌別項の実施記録を参照されたい。

3. 教育目的と成果

3. 1 国際交流実質化促進と全学への広がり

まず、第1の交流締結大学との全学的交流の広がりを目指すものとして、次のAコース、Bコースを設け、信州大学全学ホームページにて参加者を募った。また、ポスター、パンフレットも作成した（以下、パンフより引用）。

Aコース（人数制限なし）

8月7日（日）午後2時半～午後5時

集合場所：人文学部棟玄関

解散場所：松本城出口

内容：「笹本教授と松本城を歩く」

歴史学の笹本正治教授の案内で、松本城を歩きます。

自己紹介をしあい、韓国語と日本語で交流してみませんか。

参加費：無料

備考：お城までのバス代（190円）を各自用意してください。

希望者は、解散後、交流会（3500円程度）に参加できます。

Bコース（先着10名）

8月8日（月）午後12時半～8月9日（火）午後1時半（一泊二日）

集合場所：生協旭食堂前

解散場所：JR 穂高町駅

宿泊・研修場所：穂高町鐘の鳴る丘

（連絡先：穂高町教育委員会電話 82-5970）

内容 : 料理セッション (*昼食は各自済ませて参加)
穂高町鐘の鳴る丘へ (マイクロバスで移動)
掃除・自己紹介
温泉文化体験 (マイクロバスで移動)
韓国・日本食文化交流会・和室広間にて宿泊
わさび園見学・昼食 (その後マイクロバスで移動)
JR 穂高駅前へ・解散

参加費 : 4000円 (期間中の交通・宿泊・食事・保険すべて含む)

Bコースは、6学部(人文・理学・教育・繊維・工学・医学部)10名の学生参加を得た。また、Aコースは、肉声による解説であるため人数制限が必要となったが、学内他機関の教員参加および人文学部歴史学学生や卒業生の参加を得ての交流が実現した。ご多用中、解説を行って下さった笹本正治教授に謝意を表したい。

3. 2 学部教育・研究の国際化

全体を通しては、人文学部日本語文化講座日本語教育学分野の学生と教員(石神教授と筆者)が、カトリック大学研修団とともに、1週間寝食をともにする研修内容である。本研修の目的を次のように定めた。

- 1) 共感をもって相手の言語文化を理解しようとする態度を養う。
- 2) 自らの言語文化を形成している地域について知り、自文化の絶対的・相対的価値に関する認識を深めるとともに、自文化を言語で説明する能力を高める。
- 3) 国際語としての日本語についての認識を深める。
- 4) 自らの安全に留意するとともに、お客様の安全と幸福に留意する。
- 5) 継続的な関係を得るように努め、交流後の実りを願う。
- 6) 活動記録を作成する。

また、全体目標を「心を開き、礼を尽くして交流する」とし、各自個人目標を設定して研修参加することを義務づけた。これらの点は、過去の研修を踏襲しており、一貫している。

こうした国際研修活動の意義は、現在の大学教育のなかで得ることが難しい異文化・異言語との集団的直接接触(面的直接接触)の機会を設けることにありと考えている。本研修は、異文化のみならず、異言語接触における実体験を得ることに重点をおいているのは、外国語としての日本語の教授、習得を研究する日本語教育学という学問的性格から来る特色である。なお、異文化体験の意義については、次の文章を引用しておきたい。

自分と異文化社会の人々との直接接触から生じるカルチャーショックとか、

あるいは文化の壁を越えた心情的な共感のようなものを直に体験することはむずかしい。実はこのわずらわしさこそ重要だ。

(中略)、異文化社会を知るということは、単に脳ミソに「知識」を蓄積することだけではない。自分の常識とはまったく違う人々と接することから生じる、当惑や不快感や憤りや、感激や心の浄化、など生きる人間としての感情的な側面にも直接触れてくる、いわば全人的体験をすることでもある。そのような体験を通じて、私たちは、「異」なる人々とおつきあいすることに慣れてゆける。(住原則也他著(2001)『異文化の学びかた・描きかた—なぜ、どのように研究するのか』世界思想社、119-120頁)

研修成果については、本誌に、参加学生の研修記録を収録した。また、「日本語教育実習」科目の履修生が、本研修を主体的にコーディネートすることにより、国際活動と、日本語教育および習得活動についての理解を深める教育活動とした。その成果記録についても、本誌に収録している。

さらに、教員においては、複数の母語(今回は、韓国語、中国語、日本語)を有する学生に対して折々に小講義を実施することで、国家的権力関係から開放された学問的視座を得る体験につなげることを計画した。そのひとつの発展であるカトリック大学李範錫助教授の論考を、本誌に掲載することができた。

3. 3 研修後の国際活動

国際化のひとつの成果として、留学活動の促進があろう。日本語教育学分野において、2006年度の留学等を予定している学生数は、日本人学生16名中6名であり(4割弱。表1参照。国別内訳は、韓国2名、ベトナム1名、フランス1名、アメリカ合衆国2名)、高い割合を占める。

表1 平成17年10月現在の日本語教育学学生数内訳(人数)

	日本人学生	学部留学生	交換留学生
2年生	2 (1)	1 (中国)	1 (韓国カトリック大学)
3年生	5 (3)	3 (中国)	2 (同上)
4年生	9 (2)	0	1 (同上)
計	16 (6)	4	4

*日本人学生のうち括弧内は研修後留学等が確定した人数

信州大学人文学部に日本語教育学分野が設置されて以来12年間のうち、在学中の海外留学等学生は、1991年度1名(アメリカ合衆国)、2004年度1名、2005年度1名(ともに韓国カトリック大学派遣交換留学生)であった。また、研究室

単位でカトリック大学と国際交流活動を始めた時期が 2000 年であった。つまりは、留学等の増加は、韓国カトリック大学と交流を始めた時期以降に隆盛の方向性を得ているようだ。因果関係の特定は難しいが、研修活動によって国際的視野が実感的に開かれたり、国際協定締結後の交換留学生の受入に伴ってチューター活動が日常化したことなどが要因となった蓋然性は高いといえるだろう。

ちなみに、本研修に参加した日本語教育学学生については、研修後も交流を続ける傾向がある。さらに、Bコース参加学生のうち、2名は、研修後訪韓し、交流で知り合ったカトリック大学生と再会を果たしていると聞く。加えて、次に述べる地域ホームステイファミリーとのその後の交流も、多彩に展開されていると聞く。

3. 4 地域連携と国際活動の協働

信州大学人文学部と南安曇郡穂高町は、地域連携協定を締結している。穂高町役場のご協力を得て、次の目的をもった1泊2日のホームステイ活動を行うことができた。

- 1) 自文化自言語の地域的多様性を理解する (信大日本人学生)。
- 2) 日本語を母語としない学生への支援活動を通して、自文化自言語の相対化を、実体験を通して学ぶ場とする (信大日本人学生)。
- 3) 日本の地域言語文化に触れ、実体験を通じて理解を促進する (カトリック大学生ならびに信大留学生)。

これらの成果については、参加記録として本誌におさめた。また、穂高町役場曾根原悦二氏のご協力を得て、ホームステイファミリーの皆様の手記も本誌に掲載することができない、貴重な記録とすることができた。

4. 多くの方々に支えられて

今回、日本において日韓言語研修プログラムを初めて実施し、しみじみと悟ったことがある。それは、過去4回の韓国における研修において韓国カトリック大学の諸先生、学生諸兄弟がいかにご苦労されたか、ということである。国際交流において異なる相手を真に理解するためには、対等互惠の精神が大切であり、相互交流がいかに大切であるか。こうした卑近なことでも改めて実感することになった。

ちなみに、今回の交流活動が実現したのは、信州大学人文学部と2004年に地域間連携協定を締結した長野県南安曇郡穂高町(当時)、同教育委員会から、研修後半の宿舍の無償提供や移動バス助成はじめ人的援助も含めて多大なご理解とご支援を賜ったことである。平林伊三郎町長を始めとした皆様には衷心より感謝申し上げる。また、町の呼びかけにこたえてご参加下さったホームステイファミリー14家庭のご関心とご協力なしには、地域に根ざした国際理解教育の側面をか

くも充実させることは難しかったであろう。そして、信州大学が留学生受入を開始してより国際教育を支え続けてきた大学国際交流課を通じて、長野県松本市広報国際課、ボランティア団体である松本市留学生応援ファミリーの会からご理解とご支援を賜ったことも大きな力となっている。カトリック大学からの受入交換留学生に対して私的にこの4年間家族同様のご支援をいただいていた小林家の皆様から、今回もあたたかいサポートを受けたことも特筆したいことである。さらに、大学内では教育学部から研修前半の宿舍の無償提供を受け、信州大学人文学部同窓会および後援会からは、変わらぬご理解とご支援を賜った。この場を借りて、心よりの感謝を申し上げたい。

また、信州大学共通教育センター、延鎮淑先生から、日韓学生混合授業や地域活動において蓄積された方法とお力をお貸しいただけなかったら、日韓食文化交流会の成功はなかったであろう。さらに今回の活動では、人文学部市川和男事務担当副学部長の前面的なバックアップのもと、事務職員の皆様には、猛暑の中、扇風機を研修施設に運んでいただいたり、穂高での行事の事前事後のお手助けをいただいた。本年の国際事務が円滑に遂行されていくことについては、学務係佐々木千加子氏のご尽力によるところが大きい。

また、前回の韓国に引き続き桜井政男信州大学人文学部同窓会副会長のご参加を得、個人的にも大きくお支えいただいた。さらに、前回韓国言語文化研修に初めての事務職員交流のために訪韓した福嶋晴信氏、丹生山芳子氏が駆けつけてくださったことで、両大学の学生にとっては、こうした活動の継続性と発展について考える契機を与えられた。暑い盛りの研修後半に運びこまれたお心づくしの地元特産の大きな西瓜と大量の飲み物に、学生一同さらに熱い交流を展開したようであった。記して、感謝申し上げたい。また、卒業生が訪ねてくれたことも、嬉しいことであった。

最後になったが、地域の皆様から賜った若い人々への隔てのない愛情と教育的配慮に対して、この場を借りて、改めて深く御礼を申し上げたい。この夏の研修は、かけがえのない生涯の思い出として参加者の心の中におさめられたことを確信している。思い出は今後も育ちつづけ、本研修の本当の成果は長い年月のうちに花を咲かせていくであろうと思う。教育活動の成果は、本来、短兵急に求めるべきものではなく、長い時日を経てのち、力を発揮していくものである。

このことを無意識のうちに理解し、真摯で闊達な態度で参加した韓国、中国、日本の若い学生たち、また、本研修を具体的に計画し、やりぬいた実行委員、青山恭子、荒井典子、玉井芳恵、深澤史愛の諸姉に対しても改めて敬意を表したいと思う。

この研修の変わらぬパートナー、韓国カトリック大学の姜錫祐、崔彰完先生、そして、盛夏にご引率下さった李範錫先生に対して、深甚なる感謝を申し上げる。

5. 今後の相互交流に向けて

基盤整備（特に宿舍と国際事務充実化）をさらに行いながら、学術を基盤とした認識と価値の共有化をめざす大学活動を展開する必要がある。大学文化が国によって異なるので、教職員間において、それらの認識の共有が必要でもある。

また、二国間交流から多国間交流へと進む方向性を見出したい。それには、媒介言語を何にするかの問題がある。船津和幸前国際交流委員長の提言するように（「ミッション・ポッシブル」『信大日本語教育研究』第5号）、大学間共通語としての英語の存在を無視することはできない。しかしながら、人文科学の場合、学問領域にあわせて、日本語やそのほかの媒介語を選んでいくことが現実的な選択になるかと思う。いずれにしても、多様な言語文化状況に対応する認識と展望を有した若い大学人の養成は、今後も継続的に考えるべき重要課題であると考え。そして、もし、大学が地域の国際化に対してささやかな何かを成せるとしたら、それを喜びとしたい。

最後に、本研修の総責任者である渡辺秀夫人文学部長ならびに研修期間中同行いただいた総実行委員長沢木幹栄人文学部国際交流委員長に対して感謝申し上げるとともに、学部長代理としてご尽力いただいた水野知昭教授の急逝に謹んで哀悼の意を表する。

穂高町における日韓食文化交流会の
開会スピーチを行う
在りし日の水野知昭教授



第5回韓国言語文化研修で得たもの

信州大学学生参加記録

4年生	青山恭子(実行委員)……	96	荒井典子(実行委員)……	98
	玉井芳恵(実行委員)……	100	深澤史愛(実行委員)……	102
	臼井啓祐……………	104	奥田江美子……………	106
	高田千穂……………	108	古田知子……………	111
3年生	新井恵美……………	113	栗野 藍……………	115
	折笠かすみ……………	117	解 岩岩……………	119
	紀 偉……………	121	深見倫恵……………	123
	藤田亜希子……………	125	李 燕……………	127
2年生	金 玉華……………	129	金野安希子……………	131
	中西彩乃……………	133		
交換留学生	林 智善……………	135	巖 美仙……………	137
	金 煥善……………	139		

韓国カトリック大学学生参加記録

※日本語の原文をそのまま掲載

パク・チルソン……………	141	許 庭銀……………	144
イ・ボラム……………	146	姜 明蘭……………	147
キム・ソヨン……………	149	コ・ジュヒ……………	150

穂高町ホストファミリー参加記録

小林 宏……………	151	小松萬里子……………	152
佐野秋仁・智枝……………	152	曾根原久美子……………	153
所 久美子……………	154	中村愛子……………	155
林 美枝子・丸山莉奈……………	156	原 孝雄……………	156
藤原正三・永子……………	158	三澤静枝……………	159
柳澤光子……………	159	矢野口昌弘・敬子……………	160
山田 俊・さゆり……………	160	山田ゆかり……………	161